

## 繊細な音色を窓口に、 クラシックの世界へ誘う



フルート奏者

ふか え りょう た  
深江 亮太 さん

大阪音楽大学卒業後、フルート講師を務めたのち、オーストリアの音楽院へ。帰国後は神戸新聞文化センターなどで講師を務めるほか、姫路市吹奏楽団との共演やル・ボン国際音楽祭のプレコンサート出演、カフェでのミニコンサートまで、関西を中心に年間50以上のステージに立つ深江亮太さん。9月22日(土)には亀山本徳寺で開かれる演奏会に「三笛<sup>みつふえ</sup>」として出演します。

尺八奏者の原田頑山さん、インドの横笛・パンスリー奏者の松本 学さん、シンセサイザー奏者の澤崎美重子さんとのユニットで、昨年10月、加古川市の鶴林寺本堂で初舞台を踏み、姫路ミュージック・ストリートにも出演。「日本、インド、洋楽器。3つの笛がそれぞれ個性を主張しつつ混ざっていく、珍しくておもしろいユニット」と話します。

幼い頃からピアノやヴァイオリンに触れ、中学校では一転、卓球部へ。吹奏楽部の顧問から誘われ「興味ないです」と拒否したものの、文化祭で演奏に感動し、2年生で吹奏楽部に転部。「楽器はなんでもよかった」そうですが、あるとき、先輩が奏でるフルートのソロに魅了されました。「すごく繊細な音色、繊細な楽器だと。気持ちの揺らぎが音に出てしまうので難しいと感じる反面、いくらでも上手くなれるような気がして、いつまでもやめられない」とその魅力を語ります。

依頼されポップスや映画音楽などを演奏することもあります。「やっぱりクラシックが好き。音楽は言葉じゃないので、作曲家のメッセージが込められた記号をいかに読み解き、しゃべらせられるかが演奏家の仕事だと思っている」。「クラシックへの窓口になりたい」との思いから、演奏者プロフィールに経歴を書かず、身長、体重、好きな食べ物や得意料理を列記したことも。「敷居が高いと思われがちなので、普通の人が演奏する身近な音楽なんだと感じてもらいたい」と話します。

東日本大震災発生時はウィーン滞在中で、現地でチャリティーコンサートを企画。今年8月には大阪で、西日本豪雨災害の被災地に向けたチャリティーコンサートを開催しました。「演奏家なので、音楽で役に立ちたい。これからもいまの自分にできることを精一杯やって、そこから次につながっていきたい。目標をきっちり決めてしまうと余裕がなくなる気がするので、いまは漠然と『ずっとフルートを吹けてたらいいな』と思っています」。

※詳細は6ページをご覧ください。

### 表紙解説

姫路市立美術館

尾田 龍 《石膏像のある静物》 昭和25年(1950)  
市民ギャラリー「郷土の洋画家たち」出品作品

会期：9月15日(土)まで

尾田 龍は姫路生まれの洋画家です。戦後長く高校の美術教師を務めながら、国画会展に出品。彼の影響で同協会には多くの姫路在住の作家が所属していました。製鉄に取材した「鉄をつくる」のシリーズや、瀬戸内や九州の離島を描いたシリーズで知られて

いますが、1950年代には構成主義やキュビズムの影響を受けた作品を描いていました。この作品もそうした時代のものです。石膏像と壺が並んで描かれていますが、画面に奥行きを与えようとする意図はあまりなく、前後させることなく並べられています。石膏像の顔は省略されているのか、あるいはもともと面取りと呼ばれる細部を省略したものだったのかわかりませんが、デッサンの勉強のためのものと思われます。対象物の本質を描くために、やや展開図的な描き方を試みているようです。

尾田はこの後しばらく構成主義的な作品を描き、やがて半抽象的な「鉄をつくる」のシリーズに結実していきました。